

# OPINION

私はこう考える

**松村みち子** タウンクリエイター代表(都市プランナー)

1970年代、技術者として土木構造物の設計に携わる。89年岐阜大学大学院工学研究科修士課程修了。89年タウンクリエイターを設立、現在に至る。99年筑波大学非常勤講師。高知県文化環境アドバイザー、岐阜県道路・舗装技術協会理事、砂防地すべり技術センター理事ほか公職多数。土木学会フェロー、日本環境共生学会理事、東京都建設局事業評価委員等として公共事業に関わる。都市計画、交通・環境問題、景観等を専門分野とする。

## 子どもといっしょに地域を歩き、まちの人々を知ると、子どもの安全を守る

子どもへの犯罪が社会的問題としてクローズアップされている。内閣府の資料では、2004年に子どもが被害者になった犯罪は35万5675件で、全刑法犯罪の被害件数の1割強になるという。松村さんは、子どもたちが公園、商店街、駐車場、学校、道路などあらゆるところで被害にあっていることから、防犯だけでなく交通安全を含めた子どもの安全を考えたまちづくりを提唱している。

「最近、通学路で子どもが誘拐され、殺される事件が相次いで発生しまして、栃木県などでは、小学校の通学ルートの見直しをしています。安全のために避けてきた交通量の多い大通りを、人の目があるから安心できるとして、通学ルートを選ぶ動きも出てきました。そうなれば改めて、子どもに対する交通安全教育が必要になってきます。既存の通学路の整備によって安全性を高めることもできます。例えばガードレールを設置すれば、クルマへの連れ込みと事故対策の両方に効果があります。子どもの実態に合わせた整備をしていかないと、子どもは決められた道を通ってくれません。大事なのは、まちの中からできるだけ死角を少なくすることです。」

「大人と子どもとは、危ないと感じる場所が必ずしも一致しません。子どもの120〜140cmの目の高さの世界は大人とは違いますし、大人では見落としがちなことあるからです。」

子どもの視線で通学路も含めたまちを点検することを松村さんは薦める。ヒヤリ地図を応用した危険マップや安全マップづくりが各地で行われているが、できれば地域の大人が

子どもと一緒にまちを歩き、地図を作り上げてほしいという。

「低学年の子どもの中には、地図が読めない子が大勢います。大人がせっかくな安全マップをつくって掲示しても、理解されなければただの紙です。子どもを参加させるのは手間がかかり大変ですが、子ども自身に危ない場所を認識してもらい、あるいは困ったときに逃げ込める店舗やその人の顔を知ってもらい、それによって、いざというときの身構えができるのです。」

### 子どもを見守る地域の人の目が大事

各地で子どもを犯罪から守るための防犯パトロールが行われている。併せて子どもの下校時間に、お年寄りが家の前や街角で立ち話をしながらそれとなく子どもを見守ろうという運動が広がっている。『ま』の中に防犯カメラを備えても、犯罪

抑止には限界があります。結局は人の目が犯罪を防ぐ。ちょっと家の前が出る、健康のために近所を散歩する。自転車に乗る。そこで学校から帰ってくる子どもたちと顔を合わせると、地域の人の目がたくさん注がれていると、犯罪も起こしにくく、安心感にもつながります。誰もができて、無理のない形で取り組まないと長続きしません。」

子どもを犯罪から守ることをきっかけに、人々が自分たちのまちに関心をもち、コミュニケーションが生まれてくるのが、遠回りのようでも子どもの安全、ひいては高齢者なども含めた地域の安全につながっていくということであろう。

またここ数年、暗い、怖い、汚いなどの理由で利用されなくなった地下道を、住民が率先して清掃・管理し、行政のバックアップによって子どもの通学路として再生する事例が増えてきたという。



「私もいくつか協力させていたいただきましたが、最近では50代ぐらいの男性が積極的にまちづくりに参加するようになってきました。今後さらに団塊の世代が活動に加わってくれば、もっと暮らしやすい地域になっていきます。地域に向けて目が増えれば、安全安心なまちにつながっていくと期待しています。」

## HOW TO LEAD

★効果的な安全手法を学ぶ

【(株)ホンダ二輪・新宿/安全運転講習会】



「歩行者優先」「徐行」「一時停止」「右折・左折」が安全運転のポイントであると、岩辺さんは座学と実技を通して受講者に伝えている

(株)ホンダ二輪・新宿では、ジャイロキヤノビーなど、ホンダの三輪スクーターを納入する企業に「安全運転講習会」を提案している。昨年は、1年間に100回以上を開催した。この「安全運転講習会」を推進しているのは、同社マネージャーの岩辺明さんだ。

### REPORT

#### 危険予測と車間距離の重要性を伝える

この日の会場は、わらび自動車教習所(埼玉県戸田市)。受講者は、(株)カクヤスの宅配スタッフ15名。同社は酒類量販チェーン「なんでも酒やカクヤス」を展開。各店舗の宅配スタッフが三輪スクーターを使い、家庭にお酒などを配達しているため、事故防止のための安全活動には積極的に取り組んでいる。

午前9時30分、講習会が始まった。最初は、教室で原付について法規の説明。原付に積載できる荷物の重量、最高速度などから、二段階右折を含めた交差点の右折方法を確認した。この後、教習コースに移動して、日

## 『止まる』ことができれば安全運転意識は向上する

### HINT

#### 若い人には『止まる』ことを重点的に指導する

常点検や乗車姿勢、三輪スクーターの基本的な操作方法を説明。実技はブレーキングから。岩辺さんは、受講者代表の1名に30km/hで走行し、目標となるパイロンを通過したところでブレーキをかけて停止してもらった。この時の停止距離は6m。2回目、岩辺さんが旗をあげた時にブレーキをかけ、停止してもらった。岩辺さんは、受講者の三輪スクーターが1回目と同じパイロンを通過した時に旗をあげる。停止距離は1回目を大きく超える14m。「1回目と2回目の差である8mが空走距離になります。前方で何かあった時、すぐに停止することはできないのです。そこで、何が起ころても安全に止まれるように危険予測をして、車間距離を十分にとりましょう」と岩辺さんがアドバイスする。

#### 停止線の手前で確実に止まることを身につけてもらう

次は法規走行。教習所内の指定されたコースを法規に従って走る。コースには「止まれ」の標識のある場所、踏切、信号機のない見通しの悪い交差点が含まれる。受講者は三輪スクーターで、このコースを繰り返し走行した。「一時停止場所では、停止線の手前で止まりましょう。左右の確認を忘れないように」と岩辺さんは受講者ができるようにしながら、繰り返し続けた。最後に、パイロンスラロームや狭路走行などを練習し、講習会は終了した。



「止まれ」の標識のある場所や、見通しの悪い交差点では、一時停止することを受講者は再確認した

講習会を始めた当初は、バランス走行や旋回など技術的な課題を中心としたカリキュラムだったが、一昨年から法規走行を取り入れたところ、講習会の参加企業に好評で、開催の要請も増えているという。「法規を遵守した運転を社員に身につけてもらうことが、各企業の課題の一つです。」(岩辺さん)。

安全運転講習会の受講者の年齢層は、10代の若い人から年配の人まで幅広い。「若い方は、法規走行の練習で、一時停止しなければならぬ場所を説明しても、最初はほとんど止まりません。」この傾向は、運転に自信がある人ほど強いそうだ。「自分はいまから、すぐに止まれると思込んでしまおう。これが事故につながります。このことを理解してもらい、ために、ブレーキングの練習では、危険を発見してからブレーキをかけるまでの反応時間として空走距離があることを具体的に示すようにしています。」

「止まる」ことの必要性を伝えることが、安全運転意識の向上につながる。日頃業務で運転される方は、ある程度の技術は持っています。あとは、当たり前と思われていることができれば、事故は起こさなはずなんです」と岩辺さんは語る。



受講者全員が30km/hで走行し、目標からのブレーキング、目標へのブレーキング、旗の合図でブレーキングの3つを練習

### ベーシック・データ

- 安全運転講習会開催目的  
主に三輪スクーターを安全に運転するための心構え、操縦方法を身につけてもらい、交通事故をなくすことを目的としている。
- 実施日(取材日)  
2006年2月15日(水) 9:30~12:30
- 取材時の受講者数  
15名